



X線透過画像全図
撮影：元興寺文化財研究所

X線発生装置：Radioflex-250EGS2
撮影条件：電圧 110Kv
電流 5mA
距離 5m
照射時間 120sec

フランティシェク・クプカ《灰色と黄金の展開》(二)

愛知県美術館 古田 浩俊

はじめに

《灰色と黄金の展開》は、1992年に愛知県美術館が収蔵して以来、下層部には別の図柄が描かれているのではないかと考えられてきた¹。2013年にこの作品を蛍光X線撮影した結果、下層の図柄の様子がかなり可視化された(4頁参照)。本論では、現存するクプカの作品を手がかりに、下層の図柄がクプカのどのような作品と関わりをもっているのかを考察し、クプカ研究の一助とする。

前提として、一度描いた作品に手を加えるという行為がクプカにとっては異例なことではなかったという事実を確認しておきたい。ヴァフトヴァーは、X線調査によりプラハ国立美術館所蔵の《茶色の線のソロ》(1912-13年)、《青の骨組》(1920-21年)、《宇宙の春Ⅱ》(1911-20年)は部分的に手が加えられていたこと、また《垂直の平面》(1912-13、24、31年)の裏面には《本の虫Ⅰ》が描かれていたこと、つまり《本の虫Ⅰ》を描いた後にキャンヴァスを裏返して《垂直の平面Ⅱ》を描いたことを明らかにしている²。ただし、《灰色と黄金の展開》のように、下の絵とはまったく異なる絵を上から描いたことが確認されている事例は知られていない。

X線撮影の画像を見てまず確認できるのは、画面上部に4分の3正面で、少し下から見上げたように描かれた女性の頭部である。顔の輪郭線は比較的是っきりしており、髪型もだいたい想像できる。左首から左肩にかけて右下がりになって下がっていく輪郭線も、はっきりと識別できる。また、二つの眼孔も認識できるが、口はぼやけており、二つの鼻孔に見える部分は鼻孔とするには少々不自然な感じがする。

一方、画面下約3分の2を占める女性の上半身は、明らかにこの頭部とは結びつかない。つまりこれは、《灰色と黄金の展開》の下に描かれていたのが、ひとつだけの画像ではなかった可能性を示唆する。女性の頭部については最後に考察することとして、まずは頭部以外の部分について論を進めることとする。

結論から先に述べれば、画面下3分の2、首から下の上半身部分は、《ガリアンの好み》(図1)、《古代風》(図7)、《口紅Ⅰ》(図11)、さらには《楕円の鏡》(図14)にまで関連すると考えられる。

I ジゴレット

クプカは1908年から10年にかけて、ジゴレット(娼婦)を主題にした一連の作品を描いた。このシリーズの形態的な特徴は、古代クレタやミュケーナイの美術の影響のもと、人物像が様式化されていることである。ほとんどの場合、顔を含めた人

体各部は正面観か側面観のいずれかで表されている。また、側面観の下半身に正面観の上半身が乗っていたり、側面観の顔に正面観の眼が描かれたりもしている。一方で色彩的な特徴は、ヴァン・ドンゲンなどからの影響により、フォーヴィズムを思わせる強烈な色彩が使われている。これらの形態と色彩によって、絵画空間は押しつぶされ、空間（奥行き）はあまり感じられない。クプカの画歴において、象徴主義時代の作品はもとより、抽象絵画（宇宙的なものも幾何学的なものも含め）においても絵画空間は常に存在していた。そうした中で、ジゴレットのシリーズは、クプカにとって、空間という分母が欠落した一種特異な作品群とも言える。

1 《ガリアンの好み》

《ガリアンの好み》³（1909年、油彩・画布、108×100cm、プラハ国立美術館、図1）は、ジゴレットのシリーズ最後の作品のひとつと考えられている⁴。このシリーズの中でキャンヴァスが一番大きい点や、1911年のアンデパンダン展に出品されている点からみても、クプカにとっては自信作であったはずである⁵。

ジゴレット・シリーズの他の多くの作品と同様に、この作品には街の歩道に立つ女性が描かれている。背景になっているのは街路に面した店舗の壁と窓で、窓には花柄のレースのカーテンが掛かっている。色彩は着衣の朱を基調として、ごくわずかな色数で描いている。女性は不自然なほど左腰を高く上げ、左肩を落としてコントラポストの姿勢が強調されている。首は異常に長く、顔は白く塗られ、頬に紅を差し、眼は黒く塗りつぶされ、口をわずかに開けている。肘まで袖のある斑模様のある丸首の服は、胸元に花のようなものが付き、それを起点として半円状に縁取りがされている。半円の中は波のような水平の柄である。腹部で服がたるんでいる様子などからは、素材の柔らかさが感じられる。朱色のエプロンを腰に結び、ポケットには誇張された大きな手を入れている。背景の窓に女性の影が映っているとはいえ、空間はあまり感じられず、極めて平面的である。

まずは《ガリアンの好み》と関連するいくつかの作品について考察しておく。

〔関連作品1〕

《ガリアンの好み》に関連する作品は何点か現存している。《ジゴレットとヒモ》（1906/08-09年、油彩・厚紙、75×72cm、カール・フリンカー画廊、図2）には、街にたむろする二人のジゴレットとヒモが描かれている。シチュエーションは《ガリアンの好み》と同様で、視野はより広角である。ヒモは石畳を歩き、彼と連れ添って歩道歩くジゴレットは側面観で、歩道に立つもう一人の太ったジゴレットは正面観で描かれている。この正面観で描かれたジゴレットが、《ガリアンの好み》の女性像に関連する。右足に重心を乗せ（右腰を上げて）、右手で裾をたくし上げて

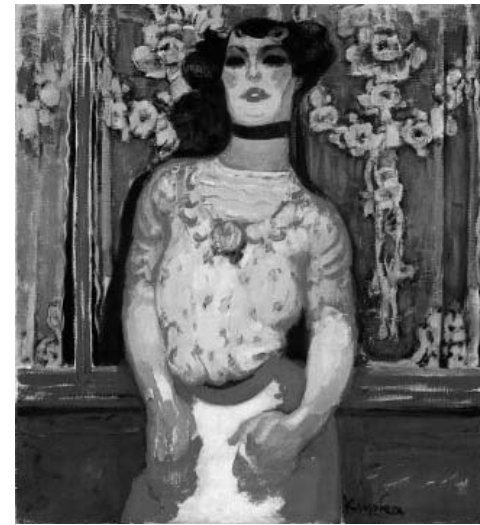


図1：《ガリアンの好み》

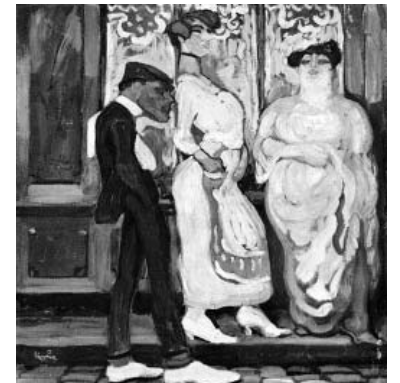


図2：《ジゴレットとヒモ》



図3：《第一步》の裏面

左足を見せてびらかせているようである（左腕がどうなっているのかはわからない）。この動作のために右腕はほぼ直角に曲げられて、前腕部は腹部の前にきている。

右側のジゴレットが後に《ガリアンの好み》へと展開していくように、ヒモは後に独立した絵画《ヒモ（聞き役）》（1909-10年、油彩・画布、104×68cm、パリ国立近代美術館）として描かれることになる。

〔関連作品2〕

《第一步》（1909-13年、油彩・画布、83.2×129.6cm、ニューヨーク近代美術館）の裏面には、フォーマットは縦長になるが《ジゴレットとヒモ》とほぼ同じ構図で未完の絵が描かれている（図3）。様式的には《ジゴレットとヒモ》に先行する作品である⁶。正面向きのジゴレットの大きな違いは、衣服である。こちらのジゴレットは、首周りが白い、五部袖の斑模様の上着に（胸にはブローチのようなものが付く）、縦縞のスカートをベルト留めし、その上に白いエプロンを着けている。もう

ひとつの違いは姿勢で、両手は《ガリアンの好み》と同様にエプロンのポケットに入れている。

〔関連作品3〕

歩道に正面向きに立ち、ポケットに両手を入れた女性を一人だけ描いた小品に《ジゴレット》(1910年、水彩・紙、29.4×26.5cm、プラハ国立美術館、図4)がある⁷。《ジゴレットとヒモ》や《第一部》の裏面に描かれた正面向きの女性と異なるのはモデルで、肉付きの良い女性ではなく若くて痩せた女性になっている。白を基調にした淡い赤の模様の入った上衣は《ガリアンの好み》に近い。顔は左に傾けているが、長い首や両肩の高さが異なる点なども《ガリアンの好み》と通じている。

〔関連作品4〕

線描画のような禁欲的な表現が特徴の《ジゴレット(歩道の王女たち)》(1909-10年、プラハ国立美術館、66×72cm、図5)⁸の左の人物は、《ガリアンの好み》に描かれた女性と同じポーズをとっている。左腰と右肩が上ったコントラポストに近い姿勢は、この女性に初めて表される⁹。一方で、斑模様の五部袖の上着、縦縞のスカートにエプロン、ポケットに両手を入れている点は、《第一部》の裏面に描かれた作品に共通する。大きな違いは肩にショール状のものを掛けている点である。また、《ジゴレット(歩道の王女たち)》の右側の女性は左手でスカートをたくし上げており、この動作は《ジゴレットとヒモ》の当該ジゴレットのそれと共通する。

これら関連作品を通じ、複数のジゴレットの立つ広角的な街の情景からジゴレット個人の表現に集約していったと推察できること、その過程で何種類かの服装やポーズが試みられていたことがわかる。



図4：《ジゴレット》



図5：《ジゴレット(歩道の王女たち)》

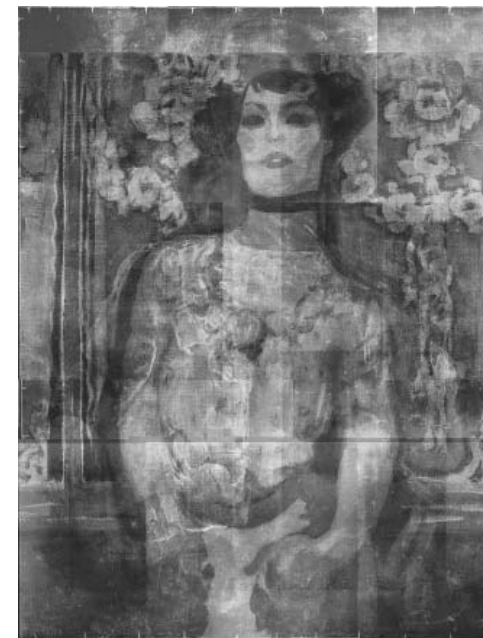


図6：X線画像+《ガリアンの好み》

〈X線画像との比較から〉

X線画像ではっきりと浮き上がった右首から右肩にかけての輪郭線の形状は、《ガリアンの好み》のそれに極めて近く、左肩を下げた姿勢にも共通性が見られる。人体の縮尺を合わせて《ガリアンの好み》とX線画像を重ねてみると(図6)、《ガリアンの好み》の女性の左下腕の、手首から人差し指にかけての逆S字形の明るい部分が、画面下中央やや右にぼんやりと白く写っている部分に相当することがわかる。X線画像にぼんやりと形が残っているのは、一度描いた部分を絵具が完全に乾ききらないうちに拭き消したためだと考えられる。断定はできないとはいえ、《ガリアンの好み》の女性と同じ形で左手の甲が描かれた可能性は高いので、X線画像では判然としていない女性の左上半身には《ガリアンの好み》の女性と同じ形の左腕が描かれていた可能性も高い。ついでながら、左臀部から太腿にかけての体の輪郭線はぴたりと一致する。

着衣に関しては、X線画像の右胸から右腰にかけて見られる「し」の字状の痕跡は、《ガリアンの好み》の当該部分の着衣の文様とすべてが一致している訳ではないが、一部には関連性が見られる。胸元の半円形部分で模様が異なる服を着ている点も共通している。X線画像では《ガリアンの好み》の腰の部分が、暗い帯状に見えており、もとはここに《ガリアンの好み》同様にベルト状の図柄が描かれていたことを想像させる。

顔の部分に関しては、X線画像の顔は斜めから描かれているが、《ガリアンの好み》は正面観で、一見両者には何の関係もないように思える。しかし両者の頭部を重ね

てみると、目鼻口の位置はずれるが、輪郭が一致する部分が見られる。X線画像の女性の左眼孔のアーモンド形は、《ガリアンの好み》の女性の前頭部の髪の毛のアーモンド形に相似する。《ガリアンの好み》の女性の顔の左右に髻のように膨らむ髪の毛のうち、左頭部の髪は画面右上に膨らみ、先端中央が窪んでいる。この形は、X線画像の女性の頭髪にも見ることができ、X線画像で斑模様に見えている髪の毛の部分は、《ガリアンの好み》の女性では髪が光る表現となっている。また右頭部の髪に関しては、X線画像の女性の右目脇の黒い髪の毛の部分は、《ガリアンの好み》の女性のその上部に相当する。一方でX線画像に目鼻口の痕跡は辿れない。

背景に関しては、X線画像にかなりはっきりと痕跡が残っている。X線画像で女性の首から画面左と左上に向かって二筋の白い煙状のものが見えており、《ガリアンの好み》と画像を重ねると、とりわけ下の筋は形がほぼぴったりと一致する。画面右上の背景は左側ほど明瞭には残っていないが、微かに残る陰影は《ガリアンの好み》のカーテンの模様とかなり一致する。

以上のことから、エックス線に映る画像は《ガリアンの好み》のための習作として利用された段階があったと考えて間違いなからう。

2 《古代風》

《古代風》（1910年、油彩・画布、110×90cm、パリ国立近代美術館、図7）には1910年の年記があるので、1909年とされる《ガリアンの好み》よりも後に完成したと考えられる。画面サイズは、ジゴレットのシリーズの中で《ガリアンの好み》に次ぐ大きさである。《ガリアンの好み》とは対照的に《古代風》は暗い夜の情景で、横顔の女性が石畳を歩き、背景には逆方向から別の女性が歩道を歩いている。背景には2本の木の幹や草らしきものが描かれているので、道路に面した公園のような場所なのであろう。人物の顔や下半身は横を向いているのに眼や上半身は正面を向いているところに、古代地中海美術の影響がはっきりと現われている。大きな手足に特徴的に見られるように、女性の身体は誇張され形式化されている。女性は黒のジャンパースカートを着ており、肘から上の上腕には網目状である。胸元の部分は網とは別の模様のように、その下に赤い飾りを付けている。首には長く薄いスカーフを掛け、片方の端を左肩から背中に、もう一方を体の左前面に回している。右手にはおそらくハンカチであろう白いものを持ち、左手には黒のハンドバックを下げている¹⁰。

〔関連作品〕

この絵に先行すると考えられる作品に《ジゴレット》（1908-09年、水彩・グアッシュ、30.5×22.3cm、個人蔵、図8）がある¹¹。この作品はまだ様式化が進んでおらず、

スケッチ風に描かれている。シチュエーションは《ガリアンの好み》と同じく店舗を背後にした昼の街角で、夜の情景の《古代風》とは異なる。しかし描かれている女性に関しては、《古代風》では頭髪のバンドがなくなることや、眼が正面観になることくらいで、着衣や持物といったモチーフに大きな変更はない。この小品を見ると、《古代風》の女性が着ている網目状の模様は、より複雑な模様であったことがわかる。一番目立つ違いは、石畳を闊歩する女性の自然な姿が、《古代風》では表現主義的という形容がふさわしいほどデフォルメされていることである。



図7：《古代風》



図8：《ジゴレット》

〈X線画像との比較から〉

《古代風》が現存することで、X線画像に写る女性が《古代風》の女性と同じように首にスカーフを巻き、片方の端を左肩から背中に、もう一方を体の左前面に回していることが判明する。首の下粒状の形が写る部分は、《古代風》の女性の着衣の柄のようでもある。その下には、位置はずれているが赤い花に相当する部分が見える。

X線画像の女性は、右腕の手首付近までははっきりと輪郭があり、肘部分の明暗の異相から肘から上が着衣であると想像される。右腕を下ろす角度は《ガリアンの好み》とも《古代風》とも違い、両者に比べて広い。右手首から先がどう描かれているか判然としないが、掌が上になるように手首を折り曲げて何かを乗せているように見える。油彩画《口紅Ⅰ》(図11)に見られる、口紅を塗る女性が左手でハンカチを持つ表現を、画像を反転させて角度を変えてみると、X線画像では判然としない右手部分がかなり明確に復元できる(図9)。X線画像の女性は、《古代風》に描かれた女性と同じく大きな右手にハンカチを持っているが、X線画像の方では手首を曲げて手を右腹の前にもってきている。《ジゴレット(歩道の王女たち)》の中で、両手をポケットに入れる左側の女性も少し右手首を折り曲げているが、X線画像ほどではない。X線画像と同じかたちで右手を描いた作品は、管見の限り現存していない。一方で、画面下端の左隅近くには少し明るく見える部分があり、画像を重ねると(図10)、《古代風》の女性が右手に持つハンカチの痕跡の可能性がある。そうだとすれば、最初は《古代風》の女性のように腕を描いたが、後に今の角度の腕に変えて、それに合わせて手首も曲げたと想像される。

X線画像の女性の左腕の形状は判然としないが、《古代風》と画像を重ねてみると、《古代風》の女性の左腕と似た形で腕が描かれていたであろうと想像できる。X線画像の画面右下部分に白く浮き上がる2本の斜線は、《古代風》の女性の左腕の手首から親指と人差指に見られるハイライトの部分に相当する。つまり右腕は肘から曲げた状態で、左腕は《古代風》とほぼ同じ形で描かれていた段階があったということになる。

X線画像の作品に《古代風》と同じ横顔の女性が描かれことがあったのかどうかをこの画像から判断するのは難しい。X線画像から判別できる微かな痕跡を頼りに横顔を再構築してみると、X線画像の女性の右頬の輪郭線に近い部分に、周りから少し薄くなった三角形の形がある。この部分は《古代風》の女性の横顔の左目の左半分に相当する。ドーナツ状のイヤリングはX線画像では、女性の左口元やや下の部分になるが、その痕跡は見出せない。

とはいえ、首に巻いたスカーフをはじめとする数々の痕跡が残されていることから推察すると、横顔もある段階では描かれていただろうと考えてもよいのではなかろうか。

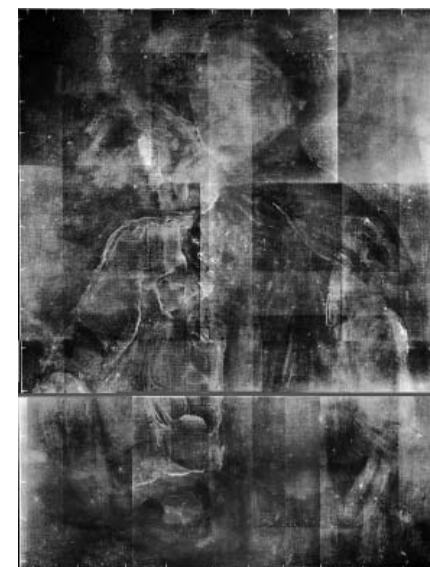


図9：X線画像+《口紅Ⅰ》
左手反転・角度変更

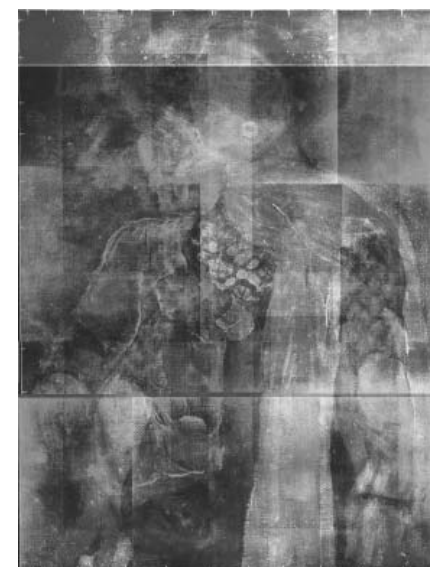


図10：X線画像+《古代風》

3 《口紅Ⅰ》

ジゴレットのシリーズの中で、横顔の女性が口紅を差す姿を描いた一連の作品がある¹²。X線画像に描かれた女性の右上腕の角度は、《ガリアンの好み》とも《古代風》とも違うが、これらより先に完成したと考えられている《口紅Ⅰ》（1908年、油彩・画布、65.5×63.5cm、パリ国立美術館、図11）に描かれた女性の右上腕がほぼ同じ角度となっている。

《口紅Ⅰ》では口紅を差す女性の上半身を左側面から描いており、右手で口紅を差し、左手にはハンカチを軽く握っている。女性は緑の斑点がある丸首の白い服を着ており、袖は肘くらいまであり、腰にはベルトを巻く。顔は《ガリアンの好み》のように白く塗られ、黄緑色がかった首や右腕の露出部分と対照をなしている。髪型は《ガリアンの好み》の女性のそれと同じようである。背景は《古代風》と同様の青系の暗色で、画面左には角柱が描かれている。女性の頭部の背後は黒く塗られた部分があり、形状から判断すると馬を表しているのであろう（右端が頭になる）。ただしこの背景から女性の置かれたシチュエーション判断するのは難しい。室内の情景であれば馬は絵かポスターと考えられるし、屋外だとしたら馬は馬車で、女性は店の窓を鏡にしていると想定される。

〈X線画像との比較から〉

X線画像の画面の縦の長さは60cmで《口紅Ⅰ》のそれは65.5cmなので両画像の胴体の縮尺はほぼ等しい。

先述したように右上腕の角度はほぼ一致し、X線画像に見られる肩や上腕内側の円弧形も《口紅Ⅰ》の筆触に見出される。《口紅Ⅰ》の首から左肘にかけて右下がりのほぼ直線に降りていく線もX線画像に見られるスカートの皺とほぼ重なっている（図12）。《口紅Ⅰ》の女性の胸の「し」の字状の輪郭線とその相似形態に重なる線はX線画像には見られないが、ほぼ同じ部分から下にかけて「し」の字状の形がいくつも見られる。《ガリアンの好み》には、この「し」の字状の筆跡が明確に表れてはおらず、《古代風》のそれは「し」の鏡像の筆跡なので、この筆跡がはっきりと残っているのは《口紅Ⅰ》だけである。X線画像では、右胸から右腰にかけて「し」の字状の痕跡が認められることから、《口紅Ⅰ》のように上半身を傾けた形ではなく、まっすぐに立った形で描かれていた可能性がある。

X線画像で胸元に見える花飾り状のものは、《口紅Ⅰ》の女性が左手に持つハンカチの可能性はある。両画像を重ねると少し位置がずれるが、もとは左腕の角度が異なっていたと考えれば、その可能性は否定できない。構図上《口紅Ⅰ》の鏡像となっている《口紅Ⅱ》（1908年、油彩・画布、73×54cm、パリ国立近代美術館、図13）は《口紅Ⅰ》に先行して描かれたと考えられており¹³、こちらの作品のハン



図11：《口紅Ⅰ》

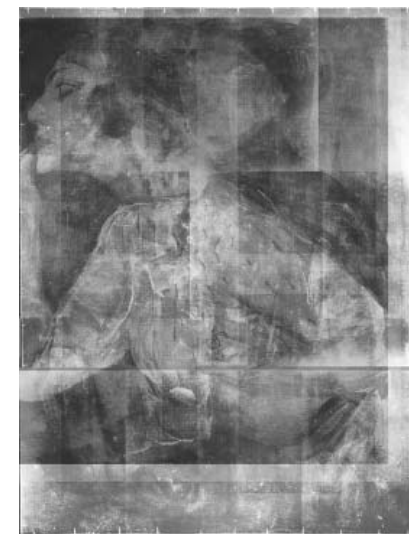


図12：X線画像+《口紅Ⅰ》



図13：《口紅Ⅱ》

カチを持つ手が首の下の胸元にまできていることは、この可能性を補強する。

顔については、《口紅Ⅰ》と同じ横顔がこの作品に描かれていた可能性は高い。口紅を持つ右手も描かれていた可能性もある。画面で前腕半分が縦に切れてしまい口紅を塗るポーズをとると不自然な構図になるので、X線画像の時点では女性は口紅を塗っていなかったとも考えられる。しかしX線画像の画布は左右の両端ともに木枠に巻き込まれており、しかもそれぞれの端は裁断されているので、元の画面は幅がもっとあったことは明らかである¹⁴。ゆえに、もともとは前腕部全体が描かれていた可能性はある。X線画像からは、《口紅Ⅰ》の女性の横顔の輪郭一顎から唇、鼻頭一の痕跡が微かに見てとれる。口紅を持つ右手や右腕下肢も描かれていたように見えるが、断定はできない。

X線画像と《口紅Ⅰ》を重ねた時、もっとも驚くべきは背景の馬の陰影である。馬の頭の部分はX線画像の女性の左頭部の髪の毛、馬の胸から口にかけてのアーチは女性の左眼孔の線と一致する。

背景の顔から馬への変更については二つの可能性がある。①《口紅Ⅰ》には当初、X線画像の女性と同様なほぼ正面向きの顔が描かれていたが、これを消して現在の女性を描いた。その際に消した女性の頭部の形を利用して馬を描いた。②《口紅Ⅰ》には当初、X線画像の女性と同様なほぼ正面向きの顔が、現在の女性の背後に一緒に描かれていたが、背後の女性だけを消してその頭部の形を利用して馬を描いた¹⁵。

Ⅱ 《楕円形の鏡》

クブカは1908-10年にジゴレットのシリーズで世俗的な主題を取り上げたが、それらを通じて形態や色彩といった造形的な課題に取り組んだ。1910年の年記のある《楕円形の鏡》(1910、ニューヨーク近代美術館、108.3×88.6cm、図14)は、その造形的課題をさらに追究した作品である。この作品は、椅子に座る女性が、左手に持つ手鏡を見ながら右手で後ろ髪を直しているところを背後から描いている。ここでは、具象的なモチーフとは関係のない抽象的な円弧による色面が女性を取り巻き、女性の体は、視点からの距離の違いが色彩によって表されている¹⁶。

〈X線画像との比較から〉

《古代風》と同じ1910年の年記をもつ《楕円形の鏡》がX線画像と関係すると考えられるのは、背後からと正面からとの違いはあるものの、どちらも女性の半身像を描いており、X線画像の女性の右上腕の角度が《楕円形の鏡》の女性の左上腕の角度に近いからである。しかもX線画像の女性の右肩に表れた複数の輪郭線は、《楕円形の鏡》のそれを思わせる。

X線画像に《楕円形の鏡》を重ねてみると(図15)、上述の上腕部はほぼ重なり、

《楕円形の鏡》で女性の右手で隠れている頭の右側の髪の毛の形はX線画像の女性の左の髪の毛の形と一致する(反対側もかなり近い)。しかし、X線画像が《楕円形の鏡》の習作であったとまでは考えない。つまりX線画像に《楕円形の鏡》の習作が描かれた段階はなかったと思われる。両者の様式がまったく異なるからである。

クブカは、X線画像を元に「楕円形の鏡」という題材そのものを着想したのではなかろうかというのが筆者の推測である。X線画像の画面左上の背景に白く見えている部分がある。既に述べたとおり、これは《ガリアンの好み》の背景となるレースのカーテンの模様となるものであるが、そこから光を発しているように見える。《楕円形の鏡》の当該部分には、明るい光源のような楕円形の鏡が配されている¹⁷。

さらに付け加えれば、X線画像の作品が後に、金色の明るい光を背後にして灰色



図14：《楕円形の鏡》

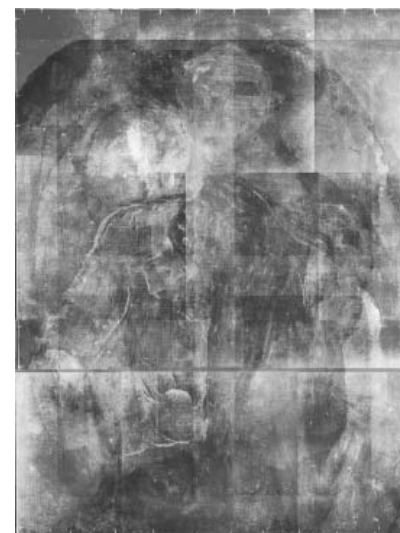


図15：X線画像＋《楕円形の鏡》

の列が並ぶ《灰色と金色の展開》に描きかえられることを考慮すると、《楕円形の鏡》との関係はきわめて示唆的である。

Ⅲ 女性の肖像

この女性の頭部が完成した形で表された作品も、これに直接関連する作品も現存していない¹⁸。それゆえに、この肖像が別の作品のための習作として描かれたのか、もともとこのキャンヴァスで完成させようとして描き始められたものかは不明である。直接関連する作品が現存していないという点から、後者の可能性が高い。

女性の頭部は4分の3正面で少し見上げるような視線で描かれており、顔の輪郭、黒い髪の形、眼孔ははっきりと確認できる。ただし両目には隈取があり、眼球の白黒や瞼までははっきりと確認できない。また、口は輪郭が判然とせず、鼻梁はまったく見えない。二つの鼻孔に見える黒い点は、明らかに鼻孔を表しているものではない。陰影のつけ方から判断すると、逆光で描いているように見える。

〔関連作品1〕

《青いリボン》（1910年、油彩・画布、65×71cm、パリ国立近代美術館、図16）に描かれた女性は、草地の上にうつ伏せになって横たわっている。その顔は左上方から鳥瞰的にとらえられており、X線画像の女性をとらえた視点とは対照的である。とはいえ、この女性はX線画像の女性と同一人物と考えられる。題名になっているとおり、女性の頭部には青いリボンが巻かれ、そのリボンは左頭部の髷の上で結んである。頭の左右に髷があり、リボンを巻いた髪型は、X線画像の女性のそれと同じである。換言すれば、《青いリボン》が存在してはじめて、X線画像の女性の髪形がかなり復元できるのである¹⁹。

隈取のある眼の表現方法に共通性があるとはいえ、《青いリボン》の女性の方が進んだ表現となっている。そこでは顔を色面で描こうとしており、顎のようにはっきりとした輪郭があるべきところに輪郭線が欠落している。

〔関連作品2〕

描きかけで放棄した女性の肖像を利用して別の作品として完成させた現存する唯一の作品に《垂直線の中のクプカ夫人》（1910-11年、油彩・画布、135.5×85.3cm、ニューヨーク近代美術館、図17）がある。夫人ユジェニーの肖像画として描き始められたが、未完のままとなり、1911年に顔を除くキャンヴァス全面が垂直の平面で埋め尽くされて、現在見られる画面になった。少し下から見上げるように描かれたユジェニーの肖像は、X線画像の肖像とほぼ同じ視点から描かれている。眼の下をピンクの色面に塗り、口の周りを黄緑の色面で描くといった固有色に拘泥しない自由な彩

色法は、1907年の《黄色の諧調》（パリ国立近代美術館）で試みられ、1910年の《家族の肖像》（プラハ国立美術館）や同時期の《大裸婦》（1909-10年、グッゲンハイム美術館）で完成の域に達する。

《青いリボン》のモデルについて言及されたことはない。この作品は1957年にクプカ夫人がパリ国立近代美術館に寄贈した28点のうちの一点であり、28点のうちには1905年の《クプカ夫人の肖像》も含まれていたことを考慮すると²⁰、モデルがクプカ夫人であった可能性はある。さらには、頬をピンクに塗り、口の周りを黄緑で



図16：《青いリボン》



図17：《垂直線の中のクプカ夫人》

隈取る顔の彩色法は《垂直線の中のクプカ夫人》と共通している。もしも《青いリボン》のモデルがクプカ夫人であるならば、X線画像に描かれた女性の肖像もクプカ夫人の可能性がある。

X線画像の女性の肖像の制作年代については、ヴォリューム感のある全体的な様式から判断すれば、1900年前後からの象徴主義の時代に位置づけることも可能であるが、眼の隈取りのようなフォーヴィスム時代にしか見られない特徴があるので、一連のジゴレットが描かれた時代（1908-10年頃）と考えられる。つまり、女性の肖像は、肖像だけが早々に描かれ、何年か後に胴体部分が描かれたわけではなく、胴体部分が描かれるのとはほぼ同じ時を同じくして描かれたと推察される。

Ⅳ 《金色と灰色の展開》

1910年頃にジゴレットのシリーズの習作として利用されたX線画像の作品は、ひとつの作品として完成されることなく、未完のまま放置された。およそ10年後に、このキャンヴァスを時計回りに90度回転させて天地を変え、《金色と灰色の展開》というまったく様式の異なる作品を描くことになる。新しいキャンヴァスを使わずに、なぜ未完の絵が描かれた古いキャンヴァスを使ったのか、決定的な理由を見出すのは難しい。横向きに置かれていたこの古いキャンヴァスを何かの機会に目にしたクプカが、そのキャンヴァスに写る画像に着想を得て、最終的に《金色と灰色の展開》という作品を完成した可能性がある。X線画像の女性像は背後から光を浴びているように見えており、「物体の背後の光」あるいは「光を背景にした物体」という絵画構造は、両者に共通する。

〈X線画像との比較から〉

X線画像と《金色と灰色の展開》を重ねてみると、(図18) 女性の左眼孔のアーモンド形は、同じ位置に同じ形で使われている。また、左のこめかみあたりの髪の毛の生え際の輪郭線、左耳から顎にかけての線もそのままの形で使われている。右肩の線も一部輪郭が重なる。つまり、クプカは下に描かれていた画像をいったんすべて塗りつぶしてから新たに《金色と灰色の展開》を描き始めたのではなく、女性像の輪郭の一部を利用しながらまったく新しい絵を描いたことになる。ただし首から下の部分は、ほとんど利用されていない。このことからクプカは《金色と灰色の展開》を描くにあたり、女性の肖像が残る画面右端の方から左方向に向けて、まさに「展開」するように筆を進めていったものと推察される。

《金色と灰色の展開》の画面左側には、灰色の大きな岩のような形がある。それは手足のある人体を表しているようにも見える。そこに縮尺を縮めたX線画像を重ねてみると、いくつかの部分で輪郭が一致する（図19）。クプカは《金色と灰色の

展開》を描くことで、下に描かれていた女性像を完全に覆い隠してしまった。まさか100年近く後にX線で下の図像が明らかにさるとは想像もしていないクプカは、上描きした絵の中に下の絵の情報を暗示したのではなかろうか。この点に関しては、その理由を含め、さらなる考察の余地が残る。

制作のプロセス

X線で映し出された画像の各段階を推測しておく。ただし、これはあくまでも現存する各作品のための習作として使われたという前提に基づく推測なので、実際にはある作品が完成した後にそれに基づいて描く（習作としてではなく別の作品として描かれた）ということもありうるので、いくつも考えられる可能性のひとつとしての推測であることを予め断っておく。

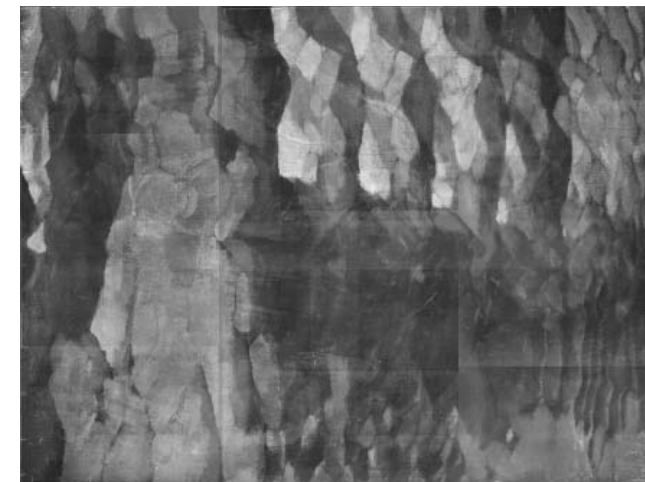


図18：X線画像＋《金色と灰色の展開》no.1

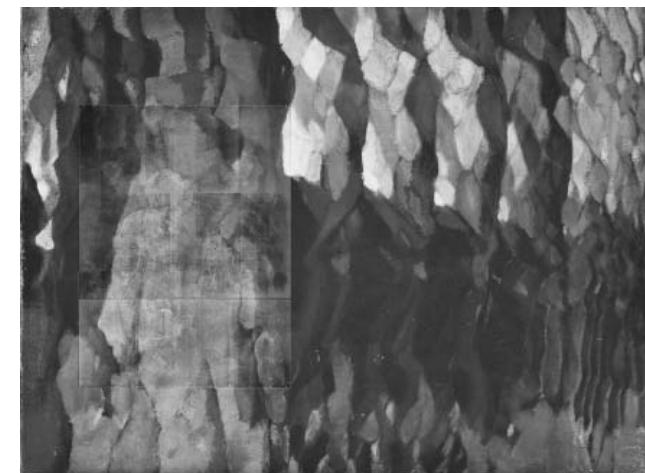


図19：X線画像＋《金色と灰色の展開》no.2

第1段階―女性の肖像

写実的な表現で女性の肖像を描き始める。肩から上まで描いたところで、最低でも絵具が乾くだけの期間放置する。

第2段階―《口紅Ⅰ》の習作として

《口紅Ⅰ》と同じ口紅を差す女性の横顔が描かれる。上半身は《口紅Ⅰ》のように前かがみではなく、真っ直ぐ立つ。左腕の角度は《口紅Ⅰ》と少し異なり、ハンカチをもつ左手の位置が少しずれている。

この状態を元にして《口紅Ⅰ》が制作される。

第3段階―《ガリアンの好み》の習作として

右腕上腕を含む右上体のみ残して、第2段階の顔、右腕下腕部、右腕を拭い去る。第1段階の女性の頭部を生かしながら《ガリアンの好み》と同じ顔を描く。上半身が正面向きになるように改変。ポケットに手を入れるように右下腕を下げる。左手もポケットに入れるように描く。服の柄を変更する。背景のカーテンを描く。この状態を元にして《ガリアンの好み》が制作される。

第4段階―《古代風》の習作として

顔、右手、左上半身、背景を拭い去る。《古代風》と同じ横顔を描く。右手首を曲げてハンカチを持つ形にする。服の柄を変更する。左手はポケットから出す。首にマフラーを巻く。この状態を元にして《古代風》が制作される。

第5段階―《楕円形の鏡》の習作として

顔を消し去ると、X線画像に写る状態となる。この段階を参考に《楕円形の鏡》が制作される。その後、10年ほど放置。

第6段階―

10年後の1919年から20年にかけて、下の絵を完全に塗りつぶすかたちで《灰色と金色の展開》を描く。

終わりに代えて

今回のX線調査により判明した最大の成果は、表面の観察などから下層に別の絵が描かれているのではないかと推察されてきた《灰色と金色の展開》について、下に別の絵が描かれていたことが科学的に実証されたことである。

これまでジゴレットのシリーズは一つ一つの独立した作品として論じられてきて

おり、作品相互の図像学的な関係についてはほとんど言及されてこなかった。二つ目としては、今回のX線調査で得られた画像により、各作品の制作過程には密接な関係があることが判明したことである²¹。また、《楕円形の鏡》のようなまったく様式の異なる作品にまで、ジゴレットの図像が反映されている可能性があることもわかった。

これまでの考察を通じ、可能性は提示できても断定するまでに至らない点が多い。今後の研究により、こうした曖昧な点が少しでも明確になっていくことを期待したい。

図版出典

・*František Kupka 1871-1957 ou l'invention d'une abstraction*, Musée d'art moderne de Paris, 1989 : 図1, 10

・*František Kupka 1871-1957, A Retrospective*, The Solomon R. Guggenheim Museum, New York, 1975 : 図2, 3

・*Frantisek Kupka*, Paladiglione d'arte Contemporanea, Palazzo Massari, Ferrara, 1987 : 図4

・『クプカ展』愛知県美術館／東京新聞、1994年 : 図5, 7, 13, 15

・*Frank Kupka*, galerie gmurzynska, Köln, 1981: 図8

・Serge Fauchereau, *Kupka*, New York, 1989 : 図12

註

1 : このことを最初に明文化したのは、『クプカ展』図録（1994年、愛知県美術館／東京新聞）、120頁、作品番号93の作品解説である。

2 : Ludmila Vachtová, *Frank Kupka: Pioneer of Abstract Art*, New York-Toronto, 1968, pp.276-278. 一般的に、クプカの作品の制作年については研究者によって相違があり統一が取れていないため、本論中の制作年はできるだけ最新で、信頼するに足る文献に基づいた。

3 : この作品には複数の題名があり、アンデパンダン展に初出品した時には《キャバレーの歌手》で、1946年のプラハでの個展の際にクプカは《ガリアンの好み》という題名を付けた。クプカが画家で版画家のアントワンヌ＝ピエール・ガリアン（1896-1963）と知り合うのは1920年頃である。

4 : ローウェルは、大きなフォーマット、極度の様式化、明るいが節度のある色彩、抑制の効いた対称的な構図をその理由に挙げている。Margit Rowell, in exh. cat. *František Kupka 1871-1957; A Retrospective*, The Solomon R. Guggenheim Museum, 1975, p.124.

5 : クプカは1911年のアンデパンダン展にジゴレットばかり3点（《横顔のジゴレット》Profil de gigolette、《ジゴレットたち》Gigolettes、《店先のジゴレット》Gigolette à la devanture）を出品した。

6 : *Ibid.*, p119. クプカは1909-10年と年記しているが、1909年を通じたジゴレットを主題にした作品の確固とした様式展開を鑑みると、ありえないように思えると、ローウェルはこの制作年に疑問を呈している。

7 : Ex. cat. *Frantisek Kupka*, Paladiglione d'arte Contemporanea, Palazzo Massari, Ferrara, 1987, no.61;

- Vers des temps nouveaux Kupka oeuvres graphiques 1894-1912*, Musée d'Orsay, Paris, 2002, no.246.
- 8：クプカは一連の作品を6点制作したという（Vachtová, in Aus. Kat. *Frank Kupka: Die andere Rialität*, 1995, galerie gmurzynska, Köln, 1995）。
- 9：腰から下の下半身だけを考えると、クプカはすでに《秋の太陽》（1905-06年、プラハ国立美術館）の右端の裸婦を同じポーズで描いている。
- 10：クプカの描くジゴレットは、ハンカチやハンドバックがそのアトリビュートとなっている。
- 11： *Frank Kupka*, Galerie Gmurzynska, Köln, 1981, Nr.50.
- 12：この口紅を主題にした作品は4点現存しており（パリ国立近代美術館に2点、マルティネル・コレクションに1点、アメリカ個人蔵が1点）、そのうちの1点はLa rougeという題名で1910年のサロンドートンヌに出品された。Denise Fédit, *L'œuvre de Kupka*, Paris, 1966, p.41.
- 13：Serge Fauchereau, *Kupka*, Paris, 1988, p.13.
- 14：拙論「フランティシェク・クプカ《灰色と金色の展開》（一）」『愛知県美術館研究紀要』第9号、2003年、6-7頁。
- 15：ジゴレットのシリーズの中には、二人の人物が前後に重なって描かれた《タンゴ》（1909年、パステル・紙、30×30cm、カール・フリンカー）のような作品もある。
- 16：前掲『クプカ展』図録、作品番号76の作品解説を参照のこと。
- 17：身体と光という点からは、右手に太陽を持つ《プロメテウス》（1909-10年、グアッシュ、49×53cm、プラハ個人／Vachtová, *ibid.*, cat. 83）は、顔の横に太陽がきているので、構図的に《楕円形の鏡》の先駆作品のひとつと考えられる。
- 18：この女性像とほぼ同じ角度から下から見上げるように女性を描いた作品に未完の半裸婦《立つ女性》（1905年、油彩・厚紙、75×49.5cm、プラハ国立美術館／図版はVachtová, *op. cit.*, cat.28, *Kupka-Waldes: The Artist and His Collector*, Prague, 1999, no.10.）がある。《立つ女性》の方が視点は一層低いのが、丸い髪形も両者に共通している。しかし体の向きがまったく逆であり、時代的にも合わないので直接的な関連はないと考える。
- 19：髪の毛をリボンで縛る女性は《ジゴレット（歩道の王女たち）》（図5）の右側の女性やの《家族の肖像》（1910年、油彩・画布、103×112cm、プラハ国立美術館）に描かれたクプカ夫人にも見られるが、両者とも頭の後ろの方で結んでおり、リボンを巻く位置が《青いリボン》の女性とは異なる。
- 20：Jean Cassou, « Nouvelles acquisitions », *La Revue des Arts*, 1958, no.6, p.286f.
- 21：とりわけ《ガリアンの好み》や《古代風》には完成作に近い習作が現存していないので、それぞれの制作過程を考察する上で貴重な資料である。

文中、挿図に使用した「X線画像」は、株式会社アールエフの協力を得て、元興寺文化財研究所が撮影した。また画像の合成その他では、田村明子の協力を得た。

X線発生装置：Radioflex-250EGS2
センサー：株式会社アールエフ NAOMI/NX-04H
撮影条件：電圧 110Kv
電流 5mA
距離 5m
照射時間 12sec